Biological Culture on the Jungle Nightjar in the Ryukyu Archipelago
― Tarama, Aguni and Kikai Islands ―

琉球列島におけるヨタカの生物文化
― 多良間島・粟国島・喜界島 ―

宮古野鳥の会・アジア猛禽類ネットワーク　久貝　勝盛（Kugai Katsumori）
喜界島サンゴ礁科学研究所、元喜界町企画課課長補佐　伊地知　告（Ijichi Tsugeru）

Abstract

The family Caprimulgidae nightjars have a record of eighty-nine (89) species in the world. However in Japan, there is only one species. Nightjars are nocturnal birds with mottled plumage in soft shades of brown, buff, black, gray, and white. During the day time, they sit motionless lengthwise on a branch.

The birds' upperparts are heavily speckled and barred in dead-leaf camouflage. They are generally grayish brown, with gray scapulars, blackish-brown throats with buff patches (A Field Guide to the Birds of Japan, 1982). White patches are seen near their wing tips and white tips on their outer tail feathers are clear on males in flight. Nightjars, black bill with brown legs, are common summer visitors throughout Japan, but in the Miyako Islands, it's a common passage visitor.

Nightjar is a species which has been specified in the Convention between the Government of Japan and the Government of the People's Republic of China, the Government of the United States of America. and the Government of the Union of Soviet Socialist Republics for the protection of Migratory Birds and Birds in Danger of Extinction, and Their Environment.

In olden times, native people in the Miyako Islands had eaten the Grey-faced Buzzard as their nutritious food source. Local people of Aguni and Kikai Islands had eaten the Jungle nightjars in the same way as the birds in the Miyako Islands. They caught the birds by a snare that was made with tails of a horse.

The authors have examined about the biological culture on the Jungle Nightjar in Tarama , Aguni and Kikai Islands.

Key Words; Jungle Nightjar, Convention between the Government of Japan and the Government of the People's Republic of China, the Government of the United States of America, and the Government of the Union of Soviet Socialist Republics for the protection of Migratory Birds and Birds in Danger of Extinction, and Their Environment.

はじめに

ヨタカ科に属する鳥は世界で 89 種、日本ではヨタカ 1 種類のみが記録されている。世界では温熱帯に広く分布する（2007、高野伸二、フィールドガイド　日本の野鳥、日本野鳥の会）。日本産ヨタカは東南アジアで越冬する。キョキョキョと連続して鳴く。雄は喉や頬の下、翼、尾羽の先に白斑がある。雌は喉と翼の先の白斑が少ない。尾羽の白斑もない。ヨタカは日米、日露、日中渡り鳥条約の指定種でもある。

かつて宮古ではサシバを捕獲し食料にした。同じようにヨタカを捕獲しヨタカ汁（喜界島方言：シビトウチイ汁）にして食していたという喜界島、粟国島を訪ね、その実態を聞き取り調査した。

この調査のきっかけを作ってくれたのは生物文化遺産プロジェクトチーム代表の当山昌直氏（沖縄大学地域研究所）である。粟国島には漫湖水鳥・湿地センターの富田宏氏、喜界島には当山昌直氏が同行した。

地域住民とヨタカに関わる生物文化、特に食文化を通した論文は初めてだと思われるので聞き取り調査の内容を出来るだけ忠実に文章化した。

１）ヨタカの分布

ヨタカ *Caprimulgus indicus* (Jungle Nightjar)はインドから東南アジア、中国東北部、ウスリー、日本にかけて広く分布する。ヨタカは夏鳥として 4～5 月にかけて日本に渡来し繁殖する。冬期には東南アジアで越冬する。ヨタカの渡り解明プロジェクトによると春の渡り捕獲記録としては 4 月 29 日、5 月 21 日がある（深井、日本鳥学会講演要旨、2011）。

繁殖地では巣らしきものは作らず地上で 1～2 個の卵を産む（藤巻、1973）。抱卵期間は 17～19 日。のど袋に虫類を溜めヒナに与えるという（Wikipedia）。南西諸島では春秋の渡りの時期に飛来する。

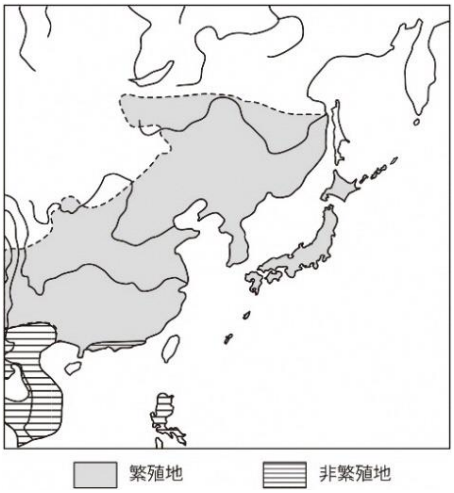

図１　ヨタカの分布（フィールドガイド　日本の野鳥、2007、改変、佐藤宣子）

２）ヨタカの渡り

日本へは夏鳥として亜種ヨタカが北海道、本州、四国、九州に渡来し繁殖する（深井、日本鳥学会講演要旨、2000）。

ヨタカの渡り解明プロジェクト（代表：深井宣男）による、カスミ網等を使用した、秋の渡り（8 月以降の渡りに限定）では以下のような結果が得られている。捕獲は 45 個体、観察 44 個体、最も早い記録は和歌山県西山の 8 月 31 日、もっとも遅い記録は京都府宇治川の 11 月 10 日。記録された期間は岩手、栃木、神奈川、京都、大阪、和歌山で 9～10 月を中心に 1 カ月半以上に及んだ。

渡りにおいては、成鳥は幼鳥よりやや遅い傾向が見られた。記録された活動時刻については日没後 22 時頃までの記録が多く、深夜や未明の記録は少なかった。秋の渡りは比較的長期間に及ぶ「だらだらした渡り」の傾向がある。

成長、幼鳥とも捕獲時の脂肪量が少ない（深井個人観察）ことから、脂肪を貯えて一気に渡るのではなく、栄養を補給しながらゆっくり渡るタイプではないかと考えられる（深井、ヨタカの渡り解明プロジェクト、中間報告、日本鳥学会講演、2011）。

３）宮古諸島におけるヨタカの渡り

（1）宮古島

宮沢賢治著「よだかの星」の主人公はヨタカである。が、「よだかは、じつにみにくいとりです」というショッキングな出だしから始まる。続けて「顔は、ところどころ、味噌をつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳までさけています。足はまるでよぼよぼで、一間とも歩けません。ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、いやになってしまうというありさまでした」。

いわれなき中傷や軽蔑を受けながらも自分自身をしっかりと見つめ直し、恨み心を待たず、死後は美しい星となって輝き続ける。読後には爽快さの残る童話である。

その醜い鳥のモデルになったヨタカ（写真 1）は　宮古諸島では旅鳥として数は少ないが 5、6～9 月、11 月に記録されている。宮古島での記録は 11 月が多い。近年の記録として、長崎遊歩道(2002,11)、大野山林（写真 2）(2008,11)（宮古野鳥の会、40 周年記念誌、2014）、市総合博物館剥製標本（下地義一、2015,11）がある。宮古諸島の中でヨタカと地域住民との関りが強く、方言名の付いている島は多良間島だけである。記録も多い。

写真 1　休息するヨタカ

（大野山林、山本晃　1988 年）

写真 2　目撃記録の多い大野山林マツ林

（2003 年）

（2）多良間島

多良間島は宮古島の西方 67 キロメートル、石垣島の北東約 35 キロメートルに位置する。人口約 1300 人でサトウキビと畜産業が主な産業である（写真 5）。

多良間島ではヨタカのことを方言で「パイダカ、パイは這い歩きのハイ、足が短くてヨチヨチ這い歩きしかできないという意味」または軽蔑した呼び方で「スプタリドウイ、薄汚れた鳥と言う意味」（羽地、2017）と言う。これは、まさに宮沢賢治の「よだかの星」（宮沢、1979）に描かれている描写そのものである。

詳しく観察した経験のある羽地邦雄氏は以下のように述べている。「松の枝に沿って止まり、じっとして動かないので朽ちた枝かコブにしか見えない。そのコブ状の塊がニュッと伸び、陰

険な目で大あくびをした。口が裂けんばかりの大あくびの形相をした」（羽地、2017）。観察場所は長嶺山から農村公園に続く農道の松の木であるという。この観察記録も秋の渡りの頃（11 月）である。

多良間島ではヨタカを捕獲しても食べることはなかった。目玉がギョロッとしてあまりの気味悪さに放鳥したという。ヨタカ捕獲には、サシバ捕獲用のワッカ（写真 3）を使用した。しかし、このヨタカ狩りは天気の悪い日にサシバ狩りのついでに捕るという程度のものであった。ヨタカが好んで止まる木はリュウキュウマツである。このことから、宮古諸島、とりわけ多良間島に多く渡来するのは秋の渡り時である。ヨタカに関しては島民（古老）からの目撃情報が何例かあり、言い得て妙の見事な方言名が付いている。聞き取り調査等から多良間島は昔からヨタカの秋の渡りの集団渡来地ではないかと考えられる。

写真 3　サシバ捕獲用ワッカ（国仲富美男氏復元）
（2018,10）

写真 4　数少ない旅鳥ヤツガシラも観察される
（2015,10）

写真 5　多良間島景観（2005,8）

写真 6　サシバ幼鳥休息。多良間島でヨタカが多く見られるのはサシバのシーズン後半頃からのようだ（1997,10）

４）ヨタカに関する聞き取り調査

(1) 粟国島

粟国島は那覇（沖縄本島）の北西 60 キロメートルに位置する人口約 800 人の島である（写真 7、8）。主な産業はサトウキビと畜産業である(粟国村、2016、Aguni Island Tourist Information)。

2019 年 4 月 20 日、粟国島でヨタカに関する聞き取り調査を行った。話者は粟国島生まれの玉寄スミさん（昭和 13 年生）、棚原宏明さん（昭和 26 年生）の二人。話の内容はＩＣレコーダーで記録した。文字化する際には出来るだけヨタカに焦点をしぼるように心がけた。なお、聞き取り調査は久貝と漫湖水鳥・湿地センターの富田が行いその一部を予報として発表した（富田、久貝、2019）。文中では久貝はK，富田はＴで示した。

写真 7　粟国島の位置図

写真 8　粟国島地図

写真 9　粟国島で見られる代表的な鳥類

写真 10　ヨタカがよく休息するリュウキュウマツ

写真 11　ヨタカの餌場（溜池）

K：まず、ヨタカの方言名を教えてください。
玉寄：ガシャンクエーと言っていた。蚊を食べる鳥と言う意味。
K：粟国島にはいつ頃来るのか。
玉寄：子供の時だから良く分からない。
棚原：9 月、10 月頃かな。捕ってたべたから。
K：粟国島ではどこの部落の人も取って食べていたのですか。
玉寄：上部落はね。木がたくさんあるから。
棚原：西の部落ですね。
玉寄：字西、あちらは県の指定で保存されている（写真 10）。こっちにはいっぱいいた。木が多いから。でも寝ているから見えない。だから罠で括って捕った。うちの兄貴なんかも捕りに行った。
K：捕ったのは何時ごろで、何名くらいで行ったのですか。行ったのは大人ですか。
玉寄：大体お昼頃。昼間は寝ているから。ほとんど個人。団体で行ったら逃げるから。大人（父親）が捕ってくる。
K：捕れるシーズンは何日くらいですか。
棚原：僕が中学の頃。学校から帰って、畑に行ったり、水汲みに行ったりした後、タイミングがあえば探しに行ったりした。
玉寄：こちらの方向に入って行ったという情報があると、ヨタカは寝ているので、捕る人たちは寝ている場所に行き、竿に罠ぐゎを付け首に引っ掛けて捕る。
K：何の木に止まったのですか。
玉寄：大きなビンギ（粟国島方言、和名：クワノハエノキ）と言う木。葉は桑に似る。木は大きい。ヨタカがよく来る場所には樹齢が何百年も経過しているような木が多い。
棚原：ぼくがよく捕ったのはガジュマルの木だった。
玉寄：そうそう、ガジュマルもね。
棚原：ガジュマルは葉っぱと木がはっきりしている。
K：捕る方法はトリモチですか。
玉寄：違う。ワッカぐゎを作った。トリモチでは捕れない。逃げられる。
棚原：二通りある。俺はトリモチで捕った。トリモチを付けたリュウキュウチクの枝を竿の先に差し込んだ（図 1）。

（トリモチ）

図 1　トリモチを利用したヨタカ捕獲用罠

それを寝ているヨタカにくっつける。ヨタカがバタバタし、トリモチの付いている枝が竿から抜け、ヨタカと一緒に落ちる。それを拾った。リュウキュウチク（方言名：カラダキ）の枝の先にトリモチ（約 15 ㎝）を付け、それをカラダキの先端部に差し込んだ。
玉寄：粘着力がないと捕れない。
K：ワッカは何で作りましたか。
棚原：ハリス、釣り糸のハリス。
K:トリモチはどのようにして作ったのですか。
棚原：トリモチはゴムを焼いて溶かした。
玉寄：終戦後はね。
棚原：生ゴム、自転車のチューブ、輪ゴムなどを混ぜた。
玉寄：油とかを入れたんじゃない。
棚原：ガジュマルの樹液。ガジュマルの樹液をプラスしたら、粘りがすごい。ガジュマルは一番粘りが出る。
K：ヨタカを多く捕る人は一日で何羽くらい捕ったんですか。
玉寄：ある人は 5 羽くらい。あの人たちは専門家だから。
棚原:ある人は 2～3 羽は捕れると言っていた。
K：普通はどれくらい捕れますか。
玉寄：1～2 羽くらい。

棚原：見つけるのが難しいから。
Ｔ（富田）：専門の人がいるのですね。
棚原：専門の人は習性をよく知っている。
Ｋ：ここではヨタカを市場で売るという事はなかったですか。
玉寄：ない。
Ｋ：ここでヨタカはいつごろから食べていたのでしょうね。
玉寄：100 年以上前から。うちのじいちゃんなんか生きていたらもう、130 歳くらいになるけど、食べている。100 年以上前から食べていますよ。
棚原：100 年以上前から食べているのは、食べているはずですよ。
Ｋ：ヨタカは家族だけで食べたのですか。
玉寄：家族だけで。美味だった。あの頃はものがない時代ですからね。小さい鳥ぐぁも捕って来て羽をとり、腹出しをして塩ぐぁつけて焼いて食べた。何羽も捕ってくるから美味しかったよ。
Ｋ：ヨタカの場合も腹出して塩を付けるのですか。
玉寄：網で焼いて食べる人もいるし、雑炊にして食べる人もいた。5 つも捕ってきたおじいちゃんなんかは、いろいろな食べ方をしている。お汁にも。うちの母の本家は本当に鳥をいっぱい、フクロウ（方言：マヤージクク）とか、ガジャンクェとか､網で縛って肩に担いできよった。あの時は冷蔵庫もないしね、お汁にして保存して食べたはず。
Ｋ：ヨタカに関する伝説、言い伝え、民話などはないですか。
玉寄：ないですね。この島で一番嫌がる鳥はヨガラス（方言：ユガラシ）。あれが鳴くときは不吉という事で。また、ガーガーなく鳥に地元の人が方言でケラマガラシと呼ぶカラスがいる。
Ｋ：どうして嫌われる。
玉寄：ケラマガラシが鳴いた後、部落から死人が出た。不幸が当たる。このカラスが群れをなしている時にはこの群れを追い返す部落もある。また、おしゃべりな人をケラマガラシャともいう。
Ｋ：鳥を焼いて食べる時は主に子供が食べたのですか。
玉寄：大人も子どもも一緒に食べた。猟銃でキジバト 5 羽捕って来たら 10 名家族で食べきれなかった。胸肉をフライにしたり、骨はお汁にした。鳩胸はいっぱい取れた。
Ｋ：ヨタカも胸肉が多かったですか。
玉寄：多かった。だから子供たちはガジャンクェ、ガジャンクェとか言っていた。
Ｋ：ヨタカが来ているかどうかは、なんでわかるのですか。
玉寄：これは時期的にわかったはず。
Ｋ：鳴き声で分かるのですか。
玉寄：鳴くのかね？　昔は鳥がいっぱいいたから、なんの鳴き声かわからんわけ。アカショウビンもここではよく鳴く。サシバが降りてきて「キッキー」と鳴いていくと天気が崩れると親から聞かされていた。だから、ある時、ゲートボールをしている時にタカがキッキーと鳴いた。「タカがタカ鳴きすぬ、天気が崩れるよ」と言ったら、ほんとに天気が崩れた。自然の動物は物知りなの。
Ｋ：昔からヨタカはいつごろ来るのか、みな知っていたのですか。
玉寄：知っていたかもしれない。わたしは子供だからわからないけど。
Ｋ：ヨタカは夜しか渡ってこないはずだから、鳴き声でわかるはずだが。
玉寄：夜、ターと鳴いて飛んでいく時がある。何かなーと思ってライトを照らすと大きな鳥が飛んでいく時がある。
棚原：一番わかりやすいのは群れ。夕方になる

と群れで飛んでいるんですよ。
玉寄：群れで飛んでくるのはガジャンクェね。
K：どのくらいの期間見られるのですか。
棚原：二か月前後くらいかな。
玉寄：群れできよった。茅の中にうずくまるくらい。10 名くらいで網をもって捕ってきよった。
K：ヨタカを捕ったのは何時から何時ごろと言うのは分かりますか。
玉寄：大体昼間ですよ。
棚原：ヨタカはグースカ寝ているから。自分の仕事があるからそんなに長時間歩けない。仕事の合間の昼、一時間以内くらい。
玉寄：真昼間。人間もちょうど昼寝をする時間帯。
K：そうすると 12 時から午後 2 時くらい。
棚原：その辺が一番寝ているから。翌朝、あの辺に飛んで行ったという情報を聞くと、朝方飛んでくるのをよく見かける。そうすると、あの辺に止まっているなと見当をつけて昼間に行って探す。
K：朝は何時くらいに林に戻るのですか。
棚原：夜が明けてからだから、大体 7～8 時くらいかな。学校に行く時間帯かな。
K：ヨタカは夕方何時くらいに飛び出すのですか。
棚原：僕らの記憶では、夕方集まるのは薄暗くなってから。18 時前後。その時に結構集まってくる。
K：集まってエサを採りに行くわけね。ヨタカがエサを採れるような湿地や水場みたいなところがあるのですか。
玉寄：昔からの大きなため池があった（写真 11）。今はもう面積は 1/3 くらいになっている。昔は鯉もいっぱいいた。だから鳥はこの池周辺に集まったはず。
K：もう一度聞くけど、ヨタカの鳴き声を聞いたことはない。
棚原：聞いたことはある。変な鳴き声をする。ハーとか、ガーとか，とにかくなんかかすれたような、はっきりしたグワーグワーではない。大声ではなくて威嚇に近いような感じの声。
玉寄：猫のかすれた声みたいな感じでしょう。
棚原：そうそう。
K：例えば、5 羽とか捕れた場合は何の袋にいれたのですか。
玉寄：袋には入れない。テグスより大きめのヒモを鼻に穴をあけて通して持ち帰った。小鳥類も鼻からヒモを通して持ち帰った。また、尾羽の大きい羽を抜いて穴を開けた。あの時は袋はないから、ヒモで括って持ってきた。物のない時代だから。
K：ここは魚も豊富にとれるはずだけれども、魚よりヨタカの方が良かったですか。
玉寄：違います。魚の方がよい。
棚原：魚の方が多く捕れる。
玉寄：ヨタカはたまにしか来ない鳥だから珍しくて捕るが、主に魚を捕った。父親はタコ捕りの名人だった。母親はタコを食べると蕁麻疹になるから、母親の分は魚を捕ってきよった。
棚原：小さい頃、歯が生える時にタコを燻製にしてしゃぶらせていた。噛む力が強くなる。僕らが小さい頃まではやっていた。
K：ヨタカをたくさん捕ってきた場合は子供たちがそれを養ったのか。
玉寄：そんなことはない。捕って来たらすぐ食べていた。どこだったかな、カゴに入れて養っていた人もいたが、一度に食べられないから鶏みたいに一羽ずつとって食べていた。
K：エサは何をあげていたのですか。
玉寄：何でも食べたんじゃないですか。
K：ヨタカを食べ物として利用したのは粟国村のすべての人たちですか。
棚原：粟国村の一部の集落のみ。
玉寄：ガジャンクェと言われるくらい、蚊をた

べるからあんまり取らない方が良い。あの時は蚊が多かった。人間がいると頭の上をブンブンするくらい。ヨタカが目の前に来たら目を開けてはないけれど捕って食べるのを見たよ。だからガジャンクェと言う言葉があるわけ。

K：本当に蚊を食べていたのですか。

玉寄：食べていた。本当に食べよった。

棚原：ヨタカは口を開けると口がひし形みたいになる。

玉寄：クジラがエサを食べるのと同じように口を大きく開ける。

K：どのくらいの群れでしたか。

棚原：200 羽近くはいたんじゃないかと思う。石を投げたら当たるくらい。低空ですからね。

K：そのような群れを見たのは今から何年位前ですか。

玉寄：50 年前？

棚原:50 年を超す。中学時代だから 1960～1965 年くらいは間違いない。

玉寄：全体的に渡り鳥の数は減ってきている。

棚原：群れは小さくなってきている。種類は減っているのも増えているのもいる。

K：皆さん今日はお忙しい中、大変ありがとうございました。

(2) 喜界島

① 山田公民館

2018,14～15 日に喜界島山田公民館と川嶺公民館でヨタカに関する聞き取り調査を行った。調査には生物文化遺産プロジェクトチーム代表の当山昌直氏が同行した。当山は喜界島では島民がヨタカを捕獲し食べていたことを報告している（当山、2019）。

出席者：伊地知告、福島一昭、稲津文昭
当山昌直、久貝勝盛

喜界島は鹿児島から南に約 380 キロメートル、奄美大島から東に約 25 キロメートルに位置する。主な産業はサトウキビである（喜界島、喜界島観光物産協会）。

K：宮古島出身の久貝勝盛と言います。今日はヨタカについていろいろ教えてください。まず、ヨタカの方言名について。

—シビトウチイという。

K：ヨタカは何月頃来るのですか。

—11 月 3 日頃。夕方道路を飛んでいるのをみかける。

K：何日くらい滞在するのですか。

—翌年の 2 月頃まで。

K：春にはどうですか。見られますか

—見られない。5～6 月頃キョッキョッと鳴いているのを聞いたことがある。多分ヨタカだはず。

K：飛来する場所は決まっているのですか。

—ほぼ決まっている。山の下あたり。ヨタカは必ず顔を太陽に向けて眠る。顔は南向きにする。飛んでいる時は口を大きく開けてエサを捕る。捕獲するとキョッキョッとなく。

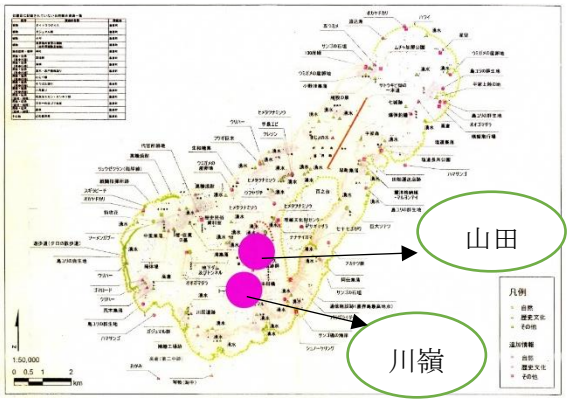

図 2　喜界島地図（山田・川嶺地区）

（喜界島町役場提供）

写真 12　ヨタカが多く見られる場所

山田集落（写真：伊地知告、2020,11,6）

写真 13　ヨタカが多く見られる場所

川嶺集落（写真：伊地知告、2020,11,6）

写真 14　喜界島観光案内板

写真 15　水辺のバレリーナ

渡り途中のセイタカシギも観察される

写真 16　山田公民館ヨタカ聞き取り調査

（伊地知、当山、久貝、福島、稲津）

写真 17　ヨタカの多く見られる池（餌場）

（川嶺集落）

Ｋ：捕獲の方法を教えてください。
― 4 メートルほどの竹の先端に馬のしっぽで作ったワッカを取り付けて捕った（写真 18）。昼間（12：00～15：00）に捕る。早朝は寝ている。クビにワッカを引っ掛けるまでは気が付かない。ぐっすり寝ている。
Ｋ：ヨタカはどのようして見つけるのか。
―ヨタカが来るとメジロが騒がしくなるので居場所がわかる。ガジュマルに休息する。ガジュマル樹肌は白っぽい、ヨタカは黒っぽいのですぐ区別がつく。昔は高くない墓石（せいぜい 3 メートル位）にも止まった。釣り竿（5 メートルくらいまで伸びる）が普及するとそれで捕った。馬のしっぽが取れない場合はテグスを利用した。
Ｋ：馬のしっぽで捕る方法というのは昔からあったのか。誰から教えてもらったのですか。親からですか。
―そうです。親から教えてもらった。

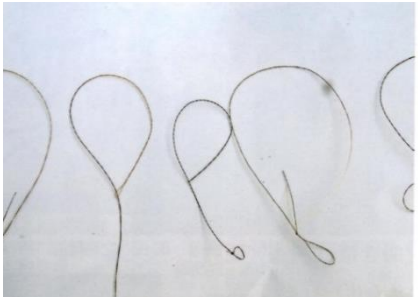

写真 18　ヨタカ捕獲用ワッカ（馬の尾毛で作った）
（稲津文昭氏、Ｓ23 年生によって復元）

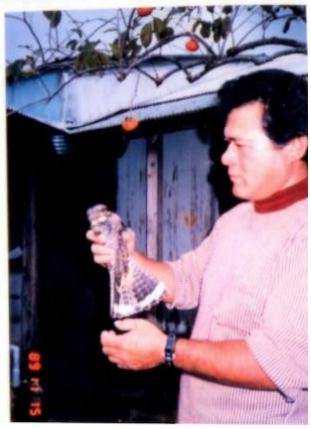

写真 19　捕獲されたヨタカ（1989,11,5）
（写真 18・19　伊地知告、稲津文昭氏提供）

Ｋ：ヨタカ狩には何人かで行ったのですか。
― 一人で行く。
Ｋ：シーズン中には大体何羽くらい捕れたのですか。
―5～6 羽。鍋料理にしたり、だしをとったりした。シーズンのピークは 11～12 月。1 月頃になると、キビの収穫で多忙。ヨタカを捕る時間がない。
Ｋ：一番多く見られるのは 1 日のうち何時ごろか。
―夕方頃。
Ｋ：喜界島に飛来するのは何時ごろか。
―わからない。
Ｋ：喜界島でのピークはいつですか。
― 11 月頃。
Ｋ：オス、メスの区別はやっていたのか。
―やっていた。白っぽいのがメスだと聞いている。
Ｋ：喜界島ではこの山田あたりでしかヨタカを捕獲して食べるという風習はないのか。
―近くの川嶺部落と山田のみ。
Ｋ:ヨタカの捕獲場所はどういう環境でしたか。
―森林や藪（やぶ）の縁。集落隣接森林縁と集落内の木や道路わきの木。
Ｋ：ヨタカを多く捕ったら何羽かを飼ったのかな。
―飼わない。
Ｋ：ヨタカの料理方法を教えてください。煮るのか焼くのか。
―スズメと一緒。羽ごと煮て羽と内臓を取り出す。煮たり焼いたりした。雑炊にもした。そのままの形で焼いた。鍋料理をシビトウチイ鍋と呼んだ。
Ｋ：鍋には何羽くらいのヨタカを入れたのか。
1～2 羽。蒸し焼きにもした。
Ｋ：味はどうだったですか。秋は渡りに備えて皮下脂肪を十分貯えているから美味しいと思う

が。
—皮下脂肪は黄色くて大変美味だった。
Ｋ：ヨタカ鍋は親戚も呼んで食べたのか。
—普通の食べ物なので特に親戚を呼ぶことはない。
Ｋ：ヨタカを多く捕った時は飼育しながら食べるという事はなかったか。
—なかった。捕って来たらすぐに処分した。
Ｋ:ヨタカは何と言う木により多く止まったか。
—マツ、ガジュマルの枝に平行に止まる。太い幹を爪でしっかりつかんで眠る。マツやガジュマルの樹肌は白っぽい、ヨタカは黒っぽいのですぐわかる。
Ｋ:ヨタカ狩りには子ども達も連れて行ったか。
—そういうことはない。数もそれほど多くはない。子供たちは捕る方法を知らない。
Ｋ：この伝統的なヨタカ捕獲方法は昔から喜界島にはあったのか。
—あった。宮古のサシバ捕獲と同じ。
Ｋ：ヨタカに関する言い伝え、民話等はないのか。ヨタカとの関りが深いから何かあるはずだが。
—ない。
Ｋ：宮古ではサシバのシーズン中、サシバ捕りのメンバーが集まるとサシバの捕獲数や料理の仕方などそれぞれに自慢話をしあった。ヨタカに関して喜界島ではどうだったのですか。
—ヨタカを捕るときは一人一人歩き回るから人との出会いはそれほど多くない。
余談だが、メジロはトリモチで捕った。
Ｋ：宮古のサシバの場合、爪は指輪にして子供たちのおもちゃ、羽は箒にした。ヨタカの場合、羽や爪はどうしたのか。
—ヨタカの場合、みな一緒に煮るので、そういうことはなかった。
Ｋ：ヨタカ鍋の話はとても興味深い。これまでヨタカの研究者は来島しなかったのか。
—来ていない。
Ｋ：ヨタカについて少しまとめます。ヨタカは夏鳥（春に南の島々から日本に渡り、日本で繁殖、秋にはまた南の島々に渡って越冬する鳥類）。年に二回渡りをする。アカショウビンと同じように 5・6 月頃日本に渡り繁殖（春の渡り）。シロハラと同じように 10・11 月に東南アジアに渡り越冬（秋の渡り）。だから、喜界島にも春と秋に渡ってきていると思います。サシバの渡り地と似ていますね。しかし、なぜ、喜界島に多く来るのか不思議ですね。
Ｋ：ヨタカの渡りのピークはいつごろですか。
— 10 月下旬から 11 月初旬。
Ｋ：ヨタカの繁殖記録はありますか。
—ない。
Ｋ:ヨタカについて書かれた記録はありますか。
—ある。元喜界島役場職員伊地知告さんが何年か前の広報に書いた。
Ｋ:ヨタカを捕る馬のしっぽは 1 回のみ使用か、それとも、数回利用可能か。
— 1 回のみ使用。シーズン中は毎日のように馬のしっぽを取りに出かけた。
Ｋ:ヨタカを捕るワッカはどのように作ったか。
—馬のしっぽ一本を四つ折りにして使用した。
Ｋ：ヨタカ以外に食べた鳥は何と言うとりでしたか。
—スズメ、シロハラ、キジバト、クビラ（バン）、カモ類、フクロウ。アカショウビンとミフウズラ（方言：サンブー）は食べない。アカショウビンは家に入ると縁起が悪いと言って追い出した後、塩をまいた。
サシバは製糖期の 2・3 月頃、メジロをエサにして釣り針を周辺に置き釣り針で引っ掛けた。
Ｋ：最後にもう一度、喜界島でヨタカ汁（シビトウチイ汁）を食べた部落を教えてください。
—山田部落と川嶺部落です。

② 川嶺公民館（2018,4,14）
話者：伊地知告、元山嘉一、満原嗣人
豊島義昭

聞き取り調査前の雑談：喜界島にはサシバ（方言名：タカ）は 10 月頃、夕方に来る。運動会の頃は高い所を飛ぶ。越冬サシバはあまり見ない。捕獲もなし。

Ｋ：それではヨタカについて教えてください。先ず方言で何と言いますか。
—シビトウチイ。
Ｋ：いつ頃見られるのか。
— 11 月頃、シロハラの渡る頃、多く見られる。
Ｋ：ヨタカはいつ捕るのか、捕る方法も教えてください。
—昼間捕る。竹竿の先に馬のしっぽで作ったワッカをとりつけ、それでヨタカの首に引っかけて捕った。
Ｋ：ヨタカのいる場所はどうして探すのか。
—メジロが騒ぐのでわかる。
Ｋ：ヨタカの料理方法を教えてください。
—まず、お湯をかけて羽をとり、内臓を取り出してから雑炊とお汁にした。ヨタカ鍋（シビトウチイ鍋）にもした。
Ｋ：ヨタカ捕獲方法は親が教えたのか。
—親は教えない。見よう見まねで覚えた。
Ｋ：ヨタカ汁の味はどうだったか。
—鶏と比較して美味だった。
Ｋ:シーズン中、ヨタカを何羽くらい捕ったか。
—あまり覚えていない。
Ｋ：もう一度、ヨタカを捕った時期を教えてください。
—春にはいない。秋に捕った。
Ｋ：ヨタカが一番多く見られる場所を教えてください。
—山手の方でため池のある所。小さな飛翔昆虫を口を開けて捕っているようだ。
Ｋ：ヨタカを養ったことはあるか。
—ない。捕って来たらすぐに料理した。余談だがスズメは高倉で捕り内臓を出し焼いて食べた。

まとめ

(1) ヨタカの生物文化について多良間島、粟国島、喜界島で聞き取り調査をした。
(2) 多良間島ではヨタカのことを方言でパイダカ（足が短くてよちよち歩き這い歩きしかできない鳥）、スプタリドウィ（薄汚れた汚い鳥）という軽蔑したような方言名もある。
(3) 多良間島では捕獲してもあまりにもグロテスクなのでタンパク源にはしなかった。
(4) 宮沢賢治の「ヨダカの星」でも、じつに醜い鳥として描かれている。
(5) 粟国島では方言でガシャンクエー（蚊を食う鳥）と呼ばれている。
(6) 粟国島ではかつて宮古のサシバと同じようにヨタカをタンパク源にしていた。渡りのシーズンには一日に 5 羽捕った人もいた。普通は 1～2 羽。
(7) 捕獲の方法は二通りあった。一つは自分たちで工夫して作った特製のトリモチ。これは生ゴム、自転車のチューブ、輪ゴム等を混ぜて作った。時にはガジュマルの樹液も使用した。ガジュマルの樹液を混ぜると一番粘り気が出た。もう一つの方法は釣り用のテグスでワッカを作って捕獲した。
(8) 粟国島ではヨタカを網の上で焼き塩をふって食べたり、雑炊やスープにして食べた。とても美味だった。
(9) 粟国島ではヨタカは 12～14 時ごろに捕った。
(10) かつて、粟国島では夕方約 200 羽の群れがエサを求めて飛び交う姿が目撃された。

粟国島も昔から集団渡来地だったと考えられる。

(11) 多良間島、粟国島、喜界島では 11 月頃に目撃記録が多くなっている。春はほとんど見ないという。

(12) 喜界島では春の渡り時、鳴き声を聞くだけで、あまり見かけない。

(13) 喜界島でのヨタカ捕獲方法は馬の尻尾を一本取り、それを 4 つ折りにしてワッカを作った。ワッカは竹竿の先端に取り付け寝ているヨタカの首を引っ掛けて捕った。

(14) 喜界島ではヨタカの塒（ねぐら）近くで、メジロが騒ぐのですぐにヨタカがいるかいないかの見当がついた。

(15) 喜界島でも秋の渡りのピークは 11 月頃である。

(16) 喜界島では秋の渡りのシーズン中、大体一人 5～6 羽捕った。

(17) 喜界島での料理方法は煮たり、焼いたり、雑炊にしたりした。一番、美味なのは鍋料理（ヨタカ鍋、方言でシビトウチイ鍋）であった。この鍋料理は喜界島ではごく普通の食べ物であった。

(18) 喜界島でヨタカをタンパク源にしたのは山田集落と川嶺集落だけである。後日、城久集落でもいくらか捕獲してタンパク源にしていたという情報があったが聞き取り調査はできなかった。

(19) 喜界島の山田・川嶺集落の人たちは森林や藪（やぶ）の縁。集落隣接森林縁と集落内の木や道路わきの木でヨタカ狩りをした。

(20) ヨタカの休息する木はリュウキュウマツ、ガジュマル、クワノハエノキ（粟国島）で共通している。

(21) ヨタカは通常、夕方 7 時頃から深夜 12 時頃までにはエサを採り終え未明には休息するようだ。

(22) ヨタカの仲間は世界で 89 種、日本では 1 種類である。

(23) 粟国島、喜界島では宮古のサシバと同じようにヨタカを捕獲しタンパク源にしていた。

(24) 粟国島や喜界島ではヨタカの習性をよく知り、独特な捕獲方法を考案した。

謝辞

この論文を書くにあたり、いろいろと便宜を図ってくれた沖縄大学地域研究所の当山昌直氏、漫湖水鳥。湿地センターの富田宏氏、粟国島、喜界島の皆さん、多良間島の羽地邦雄氏に感謝の意を表します。また、英文チェックをしていただいた県立宮古高等学校の ALT、Danielle Newman 先生、ヨタカ分布図を描いてくれた市史編さん室の佐藤宣子氏にも衷心よりお礼申し上げます。

なお、この論文の一部はトヨタ財団の支援によるものである。

参考文献

① 藤巻裕蔵、1973、ヨタカの営巣 2 例、鳥 22 : 30－32

② 新修宮沢賢治全集第八巻、1979、筑摩書房

③ Wild Bird Society Of Japan, 1982, A FIELD GUIDE TO THE BIRDS OF JAPAN

④ Chinese Wild Bird Federation, 2003, A Photographic Guide to the Birds Of Taiwan

⑤ 日本野鳥の会、2007、フイールドガイド　日本の野鳥

⑦ Maria Tanedo, Robert Hutchinson, Andrian & Trinket Constantino, 2015, A Naturalists Guide to the BIRDS OF THE PHILIPPINES

⑧ A guni Island Guide Map, 2016, Aguni Island Tourist Information, Aguni Village.

⑨ ヨタカの渡り解明プロジェクト（代表：深井宣男）、2011、日本鳥学会講演、中間報告。
山口孝、御手洗望、沖浩志、2017,東京都西多摩地区でのヨタカの生息状況（多摩川流域山地の伐採跡地を利用する鳥類に関する研究）、多摩クマタカ生態調査チーム

⑩ 羽地邦雄、2017, 12, 15、沖縄タイムス

⑪ 喜界島、喜界島観光物産協会

⑫ 富田宏、久貝勝盛、2019、粟国島におけるヨタカの聞き取り（予報）、消失の危機にある琉球の生物文化の記録保存から「生物文化遺産」創出の道を開く（概要報告）株式会社翔コピーセンター

⑬ 当山昌直、2019、琉球の生物文化を求め、島々を巡って（概要報告）、消失の危機にある琉球の生物文化の記録保存から「生物文化遺産」創出の道を開く（概要報告）、株式会社翔コピーセンター